

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 7日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：平成20年度～平成23年度

課題番号：20320131

研究課題名（和文）「マイクロサッカードとしての在来知」に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on “Local Knowledge as Body Movements”

研究代表者

杉山 祐子（SUGIYAMA YUKO）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：30196779

研究成果の概要（和文）：

本研究は、身体の「動き」に注目することによって、生業に関わる在来知（local knowledge）の特徴とその生成過程を明らかにする試みである。生業の在来知がもつ特徴のひとつは、養蜂業者が蜂を、漁師が魚を、というように、向き合う対象があたかも意思を持つかのように扱い、それに寄り添うことを通してある種の操作を行おうとする点にある。それらの検討を通して、身体の動きと対象、環境、社会が相互に方向づけあう過程において生成する、異質なシステムの接合体としての在来知を描く視座が得られた。

研究成果の概要（英文）：

This research project aims to understand the process how “local knowledge” is generated in the daily subsistence activities and to make clear the characteristics of it. In order to approach this purpose, we focused on the body “movements”. The knowledge about a certain subsistence activity is transferred directly from one person to another through the individual experience just by seeing and doing it. Common attitude can be pointed out among the people studied in this research such as beekeepers, fishermen, farmers, hunters, potters, etc. People try to direct their targets by harmonizing their body movements and skills with the targets’ own “animus”. Local knowledge is found in a conjugate of different systems through the multiple interactions among people, environment, and community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
平成21年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
平成22年度	3,200,000	960,000	4,160,000
平成23年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総計	13,700,000	4,110,000	17,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：在来知、生業、身体、動き、環境、異質なパラダイムの併存、意思をもつもの、社会の記憶

1. 研究開始当初の背景

人類学における在来の知識や技術についての研究には膨大な蓄積がある。身体運動や身体技法に関する研究や、動植物をはじめとする自然環境や色彩の分類などに注目した民族知識の研究、生業の技術に関わる研究など、幅広い領域での研究が行われてきた。とくに1980年代以降は、急速な近代化に伴う諸問題を背景に、在来の知識や技術の研究は、新たな開発の方向性を示唆する可能性を期待され、開発学や応用人類学での注目を集めた。人類学以外の分野でも身体性や技術習得への関心の高まりを背景に多方面での研究が進んだといえる。

それらを大別すると、在来知識(indigenous knowledge)等に関する研究と、経験的な知や身体知に関する研究がある。これらはきわめて近い領域を扱いながらも別の方向で展開してきた。在来知識の研究が盛んに行われてきたのは農業、医療、開発等の分野が顕著である。そこでは在来知識に見いだせる科学的な合理性を検証し、農村開発や環境保全に役立てようとする傾向もある。しかし、それは体系化された集合的知識として取り出せるものに限定されがちで、身体性や個別性、変化への目配りが手薄であった。

一方、経験知や身体知に関する研究は、最近とみに厚みを増しているが、環境や社会との接続局面への展開はまだ途上である。そのような知に共通するある種の形式についての関心もあるが、そうした認知の普遍性に関する研究は認知科学等の分野で進んでいる。総体としての在来知のありようを理解するためには、これらをつなぐ視点が必要である。

現場で私たちが魅了するのは、身体を動かして何かができるようになることによって、技術を含むもろもろの知がいちどきに獲得される経験である。在来知は、身体や環境に埋め込まれたまま、人々の日常的な実践—運動する身体—を通して形を与えられる。それは、身体の動きや生産物のかたちとして「見える」ものであり見えるものたちをどのように関係づけるかに関わる。

本研究では、「動き」という視点を切り口に、在来知のありようとその生成過程を描くことを試みた。

2. 研究の目的

一般に在来知は、集合的かつ静的なイメ

ージで捉えられがちであるが、実は個別の身体的経験をベースにしており、環境の変化に対する個人の試行錯誤や他地域との交流、開発計画の導入など、さまざまに変化する状況の中で、常に革新を加えられて、たち現れてくる動的過程そのものである。在来知のありようを十全に理解するには、このように「動きながらそこにある」現象を捉える視点が不可欠である。

本研究は、マイクロサッカード(固視微動)という概念を援用することによって、当事者の「動き」を在来知の研究にとりこむことを試みた。ここでいう在来知とは、地域の人びとが、長年にわたる環境との相互作用を通して蓄積してきた実践的、経験的な知識、また、それらと環境に関するある種の信念(世界観)の複合をさす。

在来知は、人々の経験に根ざした具体的な知であるがゆえに、抽象化された「知識」の実体として取り出すことは難しい。人々は、それがあたかも「そこにある」かのよう、在来知を習得し、ある種の信念を共有するが、そこでやりとりされるのは、身体や環境からとりだされた「知識」ではなく、身体や環境に埋め込まれたまま、人から人へ伝えられ、人が働きかける対象との関係から、直接つかみとる知である。このとき在来知は、人々の日常的な実践—運動する身体—を通して形を与えられるのであり、人と人が働きかける対象との間で、あるいは人と人との間で揺らぎながら成立している。

このような認識に基づき本研究は、在来知を環境との関係性の問題と捉え、みずから動かすことを通して、対象および対象との関係を捉えるやり方として読み解こうとするものである。それによって在来知のありようとその特徴を明らかにし、「動き」から在来知の生成過程を描く視座を見いだすことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトのメンバーはいずれも、生態人類学的な手法を通じて地域に密着したフィールドワークを展開し、生業に関わる在来知の研究を蓄積してきた。

この蓄積の上にたち、本研究は研究会活動を軸に据えた。まず、各メンバーの調査対象(日本における転飼養蜂、川漁、アフリカにおける焼畑農耕、土器づくり、オセアニアにおける漁労、極北カナダにおける狩

猟など)をとりあげ、それら「個別フィールド」での事例に即した在来知の検討と理論のすりあわせを進めた。同時に、秋田県に設けた基盤フィールドで、共同調査をおこない、共通の資料と知見から、「動き」からみる在来知の特徴とその生成過程を描くための検討をおこなった。

また個別フィールドの事例のすりあわせを効果的に進め、理論的な基盤を構築するために、在来知における「動き」を空間的側面、身体的側面、認知的側面の3側面から整理する軸を設けた。さらにそれぞれについての動きに関わる方向性として、汎用性と埋め込み性、定型化と自在化、集合化と個別化という2つの方向性を設定して、在来知の記述を試みた。

4. 研究成果

個別フィールドにおける在来知の記述のほか、基盤フィールドにおける知見との擦り合わせによって、以下のことが明らかになった。

①分節化と接続：生業における一連の身体の動きは、複数のまとまりを作りながら分節化する。生産に関わる諸分節は、その消費をめぐる別の原則によって生じる分節に接続され、全体を構成する。在来知は、別の原則に従って組織された分節が相互に接続することによって、異なるシステムの接合体として生成する。

②異質なパラダイムの併存：人々の共同作業においても、参加者は別々の経験をもって関わりながら相互に行為を接続させ、全体としての活動が成立する。それは、相矛盾するパラダイムを併存させ、突拍子もない発明の素地ともなる。

③意思をもつものとしての対象：在来知を特徴づけるのは、人々が対象を自己の管理下に置くことによってではなく、それらの指向性を受け入れ、そこに寄り添う動きを選択することによって、関係を安定させ、ある種の操作を行おうとする点である。このとき重要なのは、その対象が人間であれ非人間であれ、意思をもつものとして捉える認識のしかたである。

④社会の記憶へ：人がその対象を意思をもつものとして扱うことは、その行動特性や環境における位置取りを背景に、対象を自分のなじみの世界に住ませる結果を生む。それは知についての物語を生成し、在来知を社会の記憶へと結晶させる。

以上のような視点に基づくことによって、身体の動きと対象、環境、社会が相互に方向づけあう過程において、異質なシステムの複

合体としての在来知を描く視座が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

- ① 大村敬一 (印刷中)「技術のオントロジー：乾との技術複合システムを通してみる自然＝文化人類学の可能性」『文化人類学』77(1): pp. (査読有)
- ② Toru SOGA 2011 Refugee Life as an Extention of Pastoral Life: Survival Strategies of the Gabra Migo Pastoralists in Southern Ethiopia, *Nilo-Ethiopian Studies* 16 pp.13-27(査読有)
- ③ 大村敬一 2011「大地に根ざして宇宙を目指す：イヌイトの先住民運動と「モノの議会」が指し示す未来への希望」『現代思想』 pp.153-169
- ④ Morie Kaneko (印刷中) “Open firing techniques as Community-based technology: the case of the Ari pottery making in Southwestern Ethiopia” *Nilo-Ethiopian Studies*(査読有)
- ⑤ 大村敬一 2010「自然＝文化相対主義に向けて：イヌイトの先住民運動からみるグローバリゼーションの未来」『文化人類学』75(1):101-119 (査読有)
- ⑥ Toru SOGA 2009 “Sharing System of the “Scarce Resources” in Southern Ethiopia.” *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*, eds.by Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele, pp.357-367(査読有)
- ⑦ Morie Kaneko 2009 “Variations in pottery making in southwestern Ethiopia”, *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*. ed. by Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele , pp.383-394(査読有)
- ⑧ 大村敬一 2008 「<立ち現れ>と<言い現し>の仕組み：心的表象なき記憶とことばのメカニズムについての覚え書き」『メタファーとスキーマ (言語文化共同研究プロジェクト 2007) pp. 117-130

[学会発表] (計 30 件)

- ① Toru, SOGA Ethnic Conflict and New Ties between Pastoral Groups in Southern Ethiopia, *American Anthropologist Association* 2011年11月17日、モントリオールコンベンションセンター
- ② 杉山祐子「知の生成する現場-動きから在来知を描く」分科会趣旨説明、日本文化人類学会第45回学術大会、2011年6月

- 12日、法政大学
- ③ 曾我 亨「動き」が在来知を生成する一状況論的アプローチによる記述の試みー(分科会「知の生成する現場」)日本文化人類学会第45回学術大会、2011年6月12日、法政大学
- ④ 竹川大介「意思」を持つ自然-在来知における「動き」と「コミュニケーション」の諸相(分科会「知の生成する現場」)日本文化人類学会第45回学術大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑤ 金子守恵「動きからスタイルへ:エチオピアの女性土器職人の指使いと土器づくり」(分科会「知の生成する現場」)日本文化人類学会第45回学術大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑥ 佐治 靖「日本的遊動」日本文化人類学会第45回学術大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑦ 杉山祐子「ミオンボ林帯焼畑農耕民のイノベーションに関する考察」、日本アフリカ学会第47回研究大会、2010年5月29日、奈良文化会館
- ⑧ Morie KANEKO “Firing pots and avoiding explosions: Essay on the human/nature relationships in the open-firing practices of the Ari, southwestern Ethiopia” International workshop: Perspectives on human-nature relationships in Africa: Interrelations between epistemology and practice.2010年9月19日、京都大学
- ⑨ 大村敬一「<社交の技術>としての芸術: <芸術>と<伝統文化>を超えて」第25回北方民族文化シンポジウム「現代社会と先住民文化: 観光・芸術から考える②」2010年10月17日、網走市立オホーツク・文化交流センター
- ⑩ 杉山祐子 「だれもが「母親」-アフリカ焼畑農耕民ベンバの「母親」のすがた」日本霊長類学会第25回大会シンポジウム(招待シンポジスト)2009年7月〇日、名古屋学院大学
- ⑪ 大村敬一 「<知識>に抗する<仕事>: グローバリゼーションを超える想像力」日本文化人類学会第43回研究大会(分科会「人類学的方法はグローバリゼーションを穿ちうるか?」)2009年5月31日、大阪国際交流センター1F大ホール
- ⑫ 竹川大介 「貨幣の起源と他者認知の進化ー『記憶』と『歴史』をつなぐもの」日本文化人類学会第43回研究大会、2009年5月31日、大阪大学

[図書] (計29件)

- ① 杉山祐子(分担執筆) (印刷中) 『故郷サバイバル』恒星社
- ② 高倉浩樹・曾我亨2011『シベリアとアフ

リカの遊牧民ー極北と砂漠で家畜とともに暮らす』東北大学出版会

- ③ 本多俊和、大村敬一編『グローバリゼーションの人類学: 争いと和解の諸相』放送大学教育振興会
- ④ フランツボアズ(大村敬一訳) 『プリミティブ アート』言叢社
- ⑤ 金子守恵土2011『土器づくりの民族誌ーエチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂
- ⑥ 杉山祐子・山口恵子編2011『ものづくりに生きるー旧城下町弘前の職人』弘前大学出版会
- ⑦ 杉山祐子(分担執筆)2011『アフリカ地域と農村開発』(掛谷誠・伊谷樹一編) 京都大学出版会
- ⑧ 曾我 亨(分担執筆)2011『グローバリゼーションと<生きる世界>』(松井健、名和克郎、野林厚志共編)、昭和堂
- ⑨ 竹川大介編2011『北九州市学術研究振興事業調査研究助成報告書「大學堂」を拠点とした、旦過市場における学生のための起業支援に関する社会実験と実践研究』北九州市立大学
- ⑩ 大村敬一(4章分担執筆)2010『極北と森林の記憶: イヌイトと北西海岸インディアンのアート』昭和堂
- ⑪ 杉山祐子(分担執筆)2009『集団ー人類社会の進化』(河合香史編) 京都大学学術出版会
- ⑫ 曾我亨(分担執筆)2009『集団ー人類社会の進化』(河合香史編) 京都大学学術出版会
- ⑬ 大村敬一(分担執筆)『集団ー人類社会の進化』(河合香史編) 京都大学学術出版会
- ⑭ 曾我亨(分担執筆)2008『(講座世界の先住民) サハラ以南アフリカ』(福井勝義編) 明石書店
- ⑮ 杉山祐子(分担執筆)2008 『近代化のフィールドワーク』(作道信介編) 東進堂
- ⑯ 杉山祐子(分担執筆)2008『』
- ⑰ 山下祐介、作道信介、杉山祐子(共編)2008 『津軽、近代化のダイナミズム』御茶の水書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山祐子 (SUGIYAMA YUKO)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号: 30196779

(2) 研究分担者

曾我 亨 (SOGA TORU)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号: 00263962

(3) 研究分担者

大村敬一 (OMURA KEIICHI)
大阪大学大学院・言語文化研究科・准教授

研究者番号：40261250

(4) 連携研究者

竹川大介 (TAKEKAWA DAISUKE)

北九州市立大学・文学部・教授

研究者番号：10285455

(5) 研究協力者

金子守恵 (KANEKO MORIE)

京都大学・人間環境学・助教

研究者番号：10402752

(6) 研究協力者

佐治 靖 (SAJI OSAMU)

福島県立博物館・学芸員